

# 農 林 水 産 大 臣 賞 受 賞

肝高（きむたか）のこころとオクラで集落活性化

受賞者 かつれん は え ば ろ 勝連南風原集落  
おきなわけん う る ま し  
(沖縄県うるま市)

## ■ 地域の沿革と概要

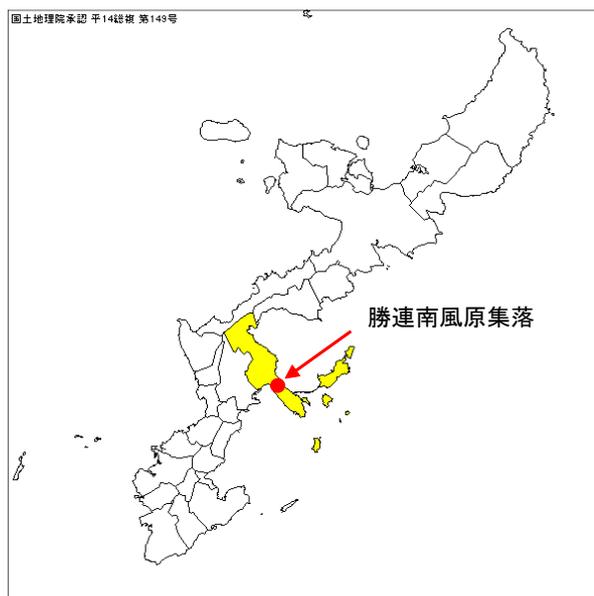
うるま市は沖縄本島中部の東側にあって那覇市から約25kmに位置しており、東に金武湾、南に中城湾を望み、有人・無人を含め8つの島々を有している。平成17年4月に2市2町の合併により誕生し、面積は87.01km<sup>2</sup>、人口約12万2千人の風光明媚な市である。市名の「うるま」は沖縄の言葉で「珊瑚の島」「景観の美しい島々」を表す。気候は亜熱帯海洋性気候に属し、一年を通じて温暖で暮らしやすいが、夏から秋にかけて例年数個の台風が襲来する地域でもある。

うるま市は、戦後の人口増加とともに都市化が進み、現在の産業別就業構造は第1次産業約6%、第2次産業約24%、第3次産業約70%と都市型の産業構造を示している。

農業については、さとうきび、きく・洋らんを中心とした花き、オクラ・さやいんげん・にんじんなどを中心とした野菜、マンゴー・中晩柑（あまSU N）を中心とした果樹、かんしょ、い草などの生産が盛んな地域である。

勝連南風原集落は、沖縄本島中部の東海岸から太平洋に大きく突出した与勝半島の根元南側に位置し、平成12年に「琉球王国のグスク及び関連遺産群」の1つとしてユネスコ世界遺産に登録された「勝連城跡」の北側に広がっている。また、地勢は北西から南方にかけて2.75 km、幅1.2 kmと比較的広く、肥沃で保水性もよく農業に適したジャーガル土壌が大半を占める。

第1図 位置図



注：白地図KenMapの地図画像を編集

第1表 地区の概要

事 項	内 容	
地区の規模	集落	
地区の性格	地縁的な集団	
農 家 率 (内訳)		6.9%
	総世帯数	1,061戸
	総農家数	73戸
専兼別農家数 (内訳)	専業農家	16戸
	1種兼業農家	7戸
	2種兼業農家	2戸
農用地の状況 (内訳)	総土地面積	340ha
	耕地面積	21ha
	田	-
	畑	21ha
	耕地率	6.1%
	農家一戸当たり耕地面積	0.3ha

## ■ むらづくりの概要

### 1. 地区の特色

勝連南風原集落の発祥は古く、1400年代に「勝連村」として始まり、1726年に現在の地にむらを移動した際は、碁盤目型の道路網や適切に配置された共同井戸など、現代の都市計画さながらのむらづくりが行われた。近年は、農村と都市の混在化が進む中で集落人口は年々増加しており、農業ではオクラの栽培が盛んである。

また、城下のむらとして長い歴史を持つ当集落では、琉球王朝時代の優れた指導者である前浜親雲上<sup>かつちん ぼーまー</sup>をはじめ先人たちの肝高<sup>きむたか</sup>の精神（高い志と誇りを持ち自立心に富む）や、獅子舞や棒術などの伝統芸能も含まれる集落の年中行事が大切に守り続けられている。

### 2. むらづくりの基本的特徴

#### (1) むらづくりの動機、背景

##### ア 琉球王朝で繁栄した「勝連城」と時代を超えた肝高<sup>きむたか</sup>の精神の継承

琉球王朝時代に前勝連城主の悪政を討伐して第10代城主となり、むらびとに平和をもたらした阿麻和利<sup>あまわり</sup>や、むらの移動に際し緻密な都市計画を実行した前浜親雲上<sup>かつちん ぼーまー</sup>などの優れた先人たちの肝高<sup>きむたか</sup>の精神を受け継ぎ、古来より継承されてきた祭祀など伝統行事を大切に守り続けてきたことや、その繁栄の歴史が「勝連城跡」として現在まで残り続けていることは、当集落にとって非常に大きな財産であり、むらづくりの動機となり続けている。



写真1 ユネスコ世界遺産「勝連城跡」

地域の英雄である阿麻和利<sup>あまわり</sup>については、近年、中高生による現代版組踊<sup>くみおどり</sup>「肝高<sup>きむたか</sup>の阿麻和利<sup>あまわり</sup>」として演じられており、出演する学生や観客に阿麻和利の精神が引き継がれ、平成27年7月までに15万6,657人の観客動員数となるなど感動を与えた。また、平成12年にユネスコ世界遺産に登録された「勝連城跡」には、年間約17万人の観光客が訪れ、人的交流面でも経済的にも地域に大きな効果をもたらしている。

##### イ 相互扶助の精神を育んだ集落独自の地割制度

1400年代に成立した琉球国は、その後1609年に薩摩藩による軍事侵攻を受け政治経済的に支配されるようになった。このため、琉球国内の各集落は、従来<sup>し のぼせ</sup>の首里王府に加え、薩摩藩への年貢（仕上世）をも上納することになり、非常に重い負担を強いられた。これらの重税に対応するため、勝連南風原集落では、むらびとたちが性別や年齢等独自の評価基準を用いて年貢を平等に負担する集落独自の「地割制度」が確立され、

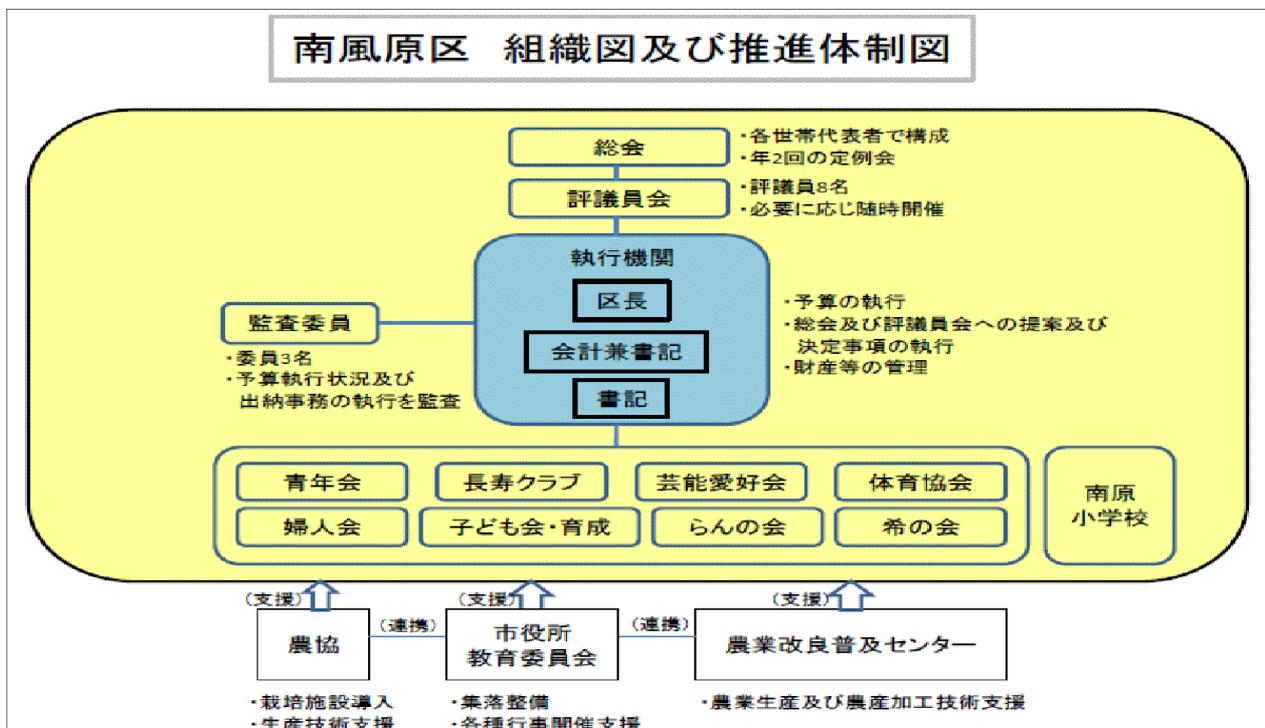
琉球処分や廢藩置縣後の明治36年まで存続した。この制度は、むらびとたちの相互扶助の精神を育む上で重要な役割を果たし、今日の集落内の相互扶助精神の礎となっている。

## (2) むらづくりの推進体制

うるま市は63の行政区から構成され、その1つである勝連南風原区では、区長と書記2名が南風原公民館に常駐し、集落運営の中心を担っている。

また、集落には、青年会や婦人会、長寿クラブ、体育協会など、住民が楽しみながら積極的に生涯学習に取り組むための様々な社会教育団体が存在し、それぞれが集落の運営や年中行事に強い関わりを持っている。これらは当集落の住民にとって欠くことのできない重要な組織であり、各々の団体が特色ある活動を展開し、連携・協調し合うことにより、南風原集落のむらづくりが行われている。

第2図 むらづくり推進体制図



## ■ むらづくりの特色と優秀性

### 1. むらづくりの性格

勝連南風原集落では、次世代を担う子供たちを集落全体で育みながら、先人たちの肝高きむたかの精神を受け継ぎ、伝統芸能・行事を大切に守り続けてきた。中でも、琉球国の繁栄の歴史である「勝連城跡」は平成12年にユネスコ世界遺産に登録され、当集落を訪れる観光客は大きく増加すると同時に、近年集落内では急速に都市化が進行している。このような情勢の下、集落の各団体や住民は、協力し合いながら農村・都市混在型の新たなむらづくりに挑戦している。

また、集落の連帯感を更に高めるため、これまでの伝統的な取組に加え、公民館を中心とした各団体やボランティア組織が連携し、「かっちん南風原

まつり」などの新たな行事にも精力的に取り組んでいる。

農業生産においては、オクラによる地域農業活性化を目指して、沖縄県農林水産部中部農業改良普及センター（以下「中部改良普及センター」という。）をはじめとする関係機関が連携して取組を実施している。特に、規格外オクラを活用したオクラ麺の開発・商品化による新たな需要創出など、需要面からのアプローチも含めた総合的な取組は、当集落におけるオクラ生産の振興に寄与するだけでなく、中部全体の農業の活性化に大きく貢献している。

## 2. 農業生産面における特徴

勝連南風原集落では、沖縄県内で「ネリ」と称される丸型の品種のほか、食生活の洋風化等によって広まった角莢<sup>かくさや</sup>オクラの栽培も盛んである。当集落を含むうるま市は、平成17年に県内初の「オクラの拠点産地」に認定されたものの、農家の高齢化が進み、生産量が伸び悩んでいる状況にあった。このため、オクラを中心とした地域活性化の取組が行われている。



写真2 角莢オクラ

### (1) オクラを中心とした農業振興と地域活性化

平成23～25年度にかけて、「元気な地域リーダーの育成」、「オクラ特産品開発による地域振興」を目標に掲げ、中部改良普及センターを中心として、集落のオクラ生産農家、南風原自治会、沖縄県立中部農林高校など多様な関係機関が連携し、



写真3 オクラ技術講習会の様子

- ① 地域の課題及び取組の進捗状況の共有化
- ② 地域リーダーの育成支援
- ③ 実証ほの設置や講習会の開催などを通じたオクラの栽培技術支援
- ④ オクラ麺の開発をはじめとした規格外オクラの利活用

などの取組が行われ、その結果、新たな青年農業者や定年帰農者が生まれるなど、当集落や周辺地域における農業振興に大きく寄与している。

特に、規格外オクラの利活用のため、沖縄県立中部農林高等学校の女子グループが生産農家と試行錯誤を重ねて開発・商品化した「オクラ麺」はTV・新聞などのメディアで数多く取り上げられるなど反響を呼んでおり、地域の農家や関係機関と連携したこれらの活動は「日本学校農業クラブ全国大会」などでも高い評価を受けている。

さらに、規格外オクラの新たな需要を創出したこれらの取組は、勝連南風原集落に留まらず、周辺地域にも大きな影響を及ぼしており、中部全体におけるオクラの作付面積の増加にも貢献している。



写真4 オクラ麺



写真5 沖縄県立中部農林高校女子グループ

## (2) 農業用水安定確保による地域活性化

沖縄県営かんがい排水事業により、平成11～18年度にかけて「与勝地下ダム」が整備され農業用水の安定供給が可能となったことから、当集落において農作物の増収・品質向上が図られ、農産物朝市会を定期開催するなど地産地消の取組が活発化している。朝市会では地元の新鮮な野菜類が並び、県内有名ホテルやうるま市学校給食センター、近隣の老健施設の調理関係者などが買い付けに訪れ、地産地消の架け橋となっている。

## 3. 生活・環境整備面における特徴

琉球国以来、勝連城下のむらとして長い歴史を持つ当集落は、古くからの伝統文化を大切に継承しつつ、都市化という時代の流れにも対応するため、創意工夫を重ねながら農村・都市混在型の新たなむらづくりに挑戦している。



写真6 年中行事で披露される青年エイサー

### (1) 大切に継承してきた伝統行事

古来、琉球国には日本本土や中国から伝来した多彩な文化が島や集落ごとに存在し、琉球政府はこれを年中行事化した。当集落では、次世代を担う子供たちを集落全体で育み、時代の変遷を経ながらも、五穀豊穡を願う豊年祭や無病息災を願う「島クサラー」など琉球国時代から続く伝統行事や獅子舞、棒術などの伝統芸能を大切に守り続けている。

### (2) 集落・都市混在型の新たなむらづくり

琉球国の繁栄の歴史である「勝連城跡」が平成12年にユネスコ世界遺産に登録されたことを受け、当集落を訪れる観光客は大きく増加している一方で、近年急速に都市化が進んでおり、集落内の各団体や住民が協力し合いながら、花と緑あふれる景観づくりにも力を注ぐなど、集落一体となって農村・都市混在型の新



写真7 市民団体による美化活動

たなむらづくりに挑戦している。

### (3) 集落の連帯感を更に高める取組

勝連南風原集落では、連帯感を更に高めるため、これまでの伝統的な取組に加え、公民館を中心に各団体やボランティア組織が連携し、「かっちん南風原まつり」や、獅子舞、棒術、臼太鼓など集落に古くから伝わる伝統芸能の保存を目的とした「かっちん南風原伝統芸能発表会」などの新たな集落行事にも精力的に取り組んでいる。